

サシバの空

秋の空高く旅立つ 暖かい南へと
谷間に渦を巻いて 生きてゆくために

ゆるやかな風に乗る 羽ばたくことなく
昇ってゆく 遠くの空に

サシバ達 空を翔けゆく
里山の恵たくさん抱いて

来る時も帰る時も 誰にも気づかれず
ここにいた証として 透き通る声残して

小さな命育むため 平和なこの地へ
降りてきた 風にまた乗って

サシバ達 空を翔けゆく
かけがえのない家族を共にして

秋の空高く旅立つ 暖かい南へと
谷間に渦を巻いて 生きてゆくために
来る時も帰る時も 誰にも気づかれず
ここにいた証として 透き通る声残して

寒くなる前の雨

時雨そっと 誰もいない
路地を一人 傘も差さず
ひとしづく 頬を撫でる
優しい風 季節の終わり告げる

濡れてしまうことより今は
忘れること手伝ってくれる
過ぎた日の記憶をそっと揺らし
心も少し やさしくなる

しとしと しずかに 銀色に光る
この雨 全てを 静かに流してゆく

時雨が降る 一人歩く
冷えた空気に 音が溶ける
言葉交わす 相手もなく
冷たい風 そんな中でささやく

孤独感ることより今は
自分だけで誰にも知られず
言葉にならないもどかしさを
ため息と共に吹き飛ばして

しとしと しずかに 銀色に光る
この雨 全てを 静かに流してゆく

時雨そっと 誰もいない
路地を一人 傘も差さず
ひとしづく 頬を撫でる
優しい風 季節は歩み進める

一人になりたくて

ああ一人になりたくて
夕暮れの街から海へ続く道を
何も持たずにただ歩くだけで
気づいた時最後の道を渡っていた

すこしずつ冷たくなって
腕にかけていた上着広げて
両手を伸ばして袖に通す

薄暗くなった砂浜降りて
波打ち際からすこし離れたところ
西の空がまだ明るく
左の耳に感じる波のざわめき

すこしずつ人がいなくなり
一人二人と帰ってゆく中で
寂しくなってまた人恋しくなる

いろいろある

あるきっかけでできた恋愛感情と
自然の成り行き of 愛情関係と
あまり違いはないかもしれないけれど
始まりがわからない方が
終わりもわからない

人を好きになるのもいろいろある

くっついて離れて繰り返すうち
そのうち別れてしまうパターンと
慰めたり喧嘩したり繰り返すうち
そのうち離れられなくなるパターンと

どのようになるのかは
自分だけでわかるはずもない

特別な気持ちの恋愛感情と
ずっと一緒にいたい愛情関係と
あまり違いはないかもしれないけれど
一方的なよりもお互いで育む方がいい

人を好きになるのもいろいろある

いろんなこと求めたり与えたりするうち
見返りを期待するパターンと
多くは望まないで思いやるだけで
見返りは求めないパターンと

どのようになるのかは
自分だけでわかるはずもない

短い秋

woo ah

ひと頃まで汗ばむ日々が
この頃の朝白く冷えた風に

枯れた葉がひとひら空を舞う
秋はいつも足早に過ぎてゆく

woo ah

ひと頃まで気さくだった会話
この頃どこかよそよそしい付き合い

別れの気配冷えてくこの吐息に
何も告げず季節は過ぎてゆく

woo ah

占地

森の中で静かに
ひっそりと並ぶ白帽子
木の影見えないところで
人の手を拒み生きている

雨のしずくを帽子に受けて
土の温もりも受けて
群れて寄り添うまるで小さな
踊り出す舞踏会

けれど幻 ホンシメジ
森の中だけで響く
その姿 その香り記憶に残る
風が吹いてふわりと揺れて
木漏れ日の中で顔出す
その形 その色忘れられないよね

今日も何気なく静かに
店に並ぶ茶色帽子
倒木に宿り育てられて
人の手を借りて生きている

綺麗なところで帽子も光って
大事に育てられて
群れて寄り添うまるで小さな
劇場の中のコンサート

けれど脇役 ブナシメジ
いつも誰かの陰に隠れ
その姿 その香り慎ましくて
心を満たす控えめだけど
いつも優しく顔をだす
その形 その色飾り気もないよね

夕映えの彼方

ふと遠くの山見渡す
夕日に染まる頃
ひとときの風が
頬を撫でてゆく

振り返る今年の冬と春は
たくさん泊まりで出かけた

夜の帳の向こうに
新たな光が
そこには もうすぐ待っている
今年の閉じる幕

振り返る今年の夏と秋は
たくさん思い出が作れた